

脱「平均」へ 探究心育てよ

教育の窓

kyoiku no mado

人工知能(AI)が進化する中、日本の将来を担う子どもたちには、どのような力が必要とされるのか。8月8日に毎日ホール(東京都千代田区)で開催された教育シンポジウム「AI時代に向けた教育はどうあるべきか」(毎日教育総合研究所、毎日新聞社共催)では、教育関係者ら約120人が、識者の熱弁に耳を傾けた。

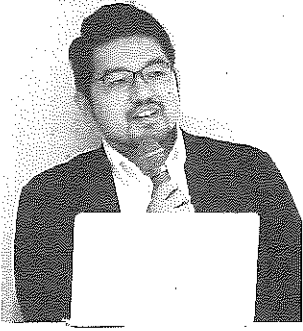
【千原慶平・写真・根岸基弘】

●対話を重視
この日は、香里ヌヴェール学院中学校・高校(大阪府豊川市)校長の池田靖章(左)と、立命館アジア太平洋大学(APU)大分県別府市)学長の出口治明(右)が、文部科学省総合教育政策局長の淺田和伸(中央)と対話を重ねた。池田氏は、AI時代に必要とされる人材の育成に力を注いでいる。APUでは、グローバルな視点から、AI時代の必要とされる人材の育成に力を注いでいる。



淺田和伸氏
文部科学省総合教育政策局長

「AI時代へ向けて」シンポ



池田靖章氏
香里ヌヴェール学院 中学校・高校校長



出口治明氏
立命館アジア太平洋大学学長



シンポジウムには多くの教育関係者が集まった

均「や普通」という発想をなくすことが必要だと主張した。日本の教育界でも危機感を感じていることを「根拠なき精神論のまん延」と述べ、その一例に組み立てを挙げた。「1年間で数千人がけがをしている」というファクト(事実)がある。チームワークが養成できるかが伝統とか聞か、人間力、モチベーション、運命神話技技技の未来の社会像をどう示すかと批判し、データに

基礎学習が打開力磨く

3氏の講演の後、パネルディスカッションが開かれた。「AIの進化で学校の教育は変わるか。コーディネーター役の毎日教育総合研究所の澤田一太郎代表取締役社長(左)の問いに、池田氏は「半ひ方を身につければ新しいも変わらぬ」との見方を示した。

学校

わたし

小、中学生の頃は学校委員をするなどいわゆる優秀生タイプでした。周囲として思いつかぬのは、中学の学年主任だった女性の先生が、友人関係で悩んでいた時期がありました。それでも「自分は学校委員だし、しっかりと責任をとる」と無理を言っていました。



女優、映画監督
小川紗良さん

が、よく考えると本当は弱い人間なのに強がっていた自分に気付いた。そんな気持ちから友達ともうまくいかなかった。周りから頼ってもらおうとするのではなく、まずは自分が周りの友人を頼らなくては何かできないと分かりました。全てお見通しの上で先生が言ってくれた一言です。

1996年東京都生まれ。2019年3月に早稲田大文化構想学部卒。NHK朝の連続テレビ小説「まんぷく」、日本テレビ系ドラマ「向かいのパスる家族」などに出演。主演映画、監督作品を控える。

困りに陥らず切大知れや

もどろろと技術的なことを教わるのですが、言葉よりも背中から学んだ印象が強い。是枝監督の撮影現場を見学した時のこと。特に印象に残っています。

出口氏は「数字、ファクト、ロジック(論理)で物事を俯瞰的に訓練を必要とする。まずは大人自らが探究力をつける」と語り、

AI時代の生き抜く「考える力」を育むためには、大人に求められる役割とは何か。池田氏は、幼少期に読書で考えを深め、「大人が言いつつも自分も読んでみる」という経験が、今も「AI時代の生き抜く」に役立っている、と語った。

「子どもは体は小さいが、心は大きい」と語り、